

P-3. 放医研養成訓練部における核医学課程

放射線医学総合研究所 養成訓練部

飯田 博美

放医研は昭和32年に開設され、昭和34年度養成訓練部の発足とともに放射線防護課程が開設された。臨床研究部の整備ならびに病院の建設を待って昭和36年度に医学課程、昭和39年度に薬剤課程、昭和40年度に生物学基礎医学課程を開設して現在に至っている。

医学課程は放射線治療および核医学の両者を研修せんとする医師に対する訓練を目的として、定員16名、期間6週間で年2回実施することとし、その第1回を昭和37年2月に放射線利用医学短期課程の名称のもとに開いた。第2回に核医学の講師として国際原子力機関(IAEA)からDr. R. M. Kniseley (Oak Ridge Institute of Nuclear Studies) が派遣された。Kniseley 博士の勧告ならびにわが国における医療の現状から判断して、第4回(昭和38年9月)から課程の期間の約1/4を放射線治療とR I診断とに分離して平行実施することにした(選択制)。第12回課程(昭和42年8月)から年2回の1つを2年以上経験者に対するR I診断のみの課程とした。昭和49年度から医学課程は年間1回、期間5週間で、経験年数の制限をつけずに実施することにし、その名称を核医学課程と改めた。

講義科目および実習科目は学問の進歩とともに絶えず改めてきたが、臨床実習用の機器の整備が進まないために、基礎科目に重点を置いているというのが現状である。核医学課程の授業時間数は144時間で、講義と実習がほぼ半々である(詳細の科目別時間はスライドで示す)。

医学課程の受講者は国公立大学(64%)、国公立病院(18%)からが大部分を占め、地域的には全国に及んでいる。医学課程全修了者415名のうち核医学を研修した者が約90%である。

P-4. 放射線科核医学部門の例

東京女子医科大学 放射線科

山崎統四郎

東京女子医科大学では放射線科の1部門として核医学部が存在し、そこで診療と卒後教育がなされる。

学生に対する卒前教育は放射線医学教室で担当するが、ここで取扱う講義は1、2年生で放射線物理学15回(1回1時間半で以下同じ)、放射線生物学15回、5年生でX線診断学29回、放射線治療学11回、核医学9回、放射線防護・被曝の管理2回の計81回であり、他に6年生の病院実習として2週間が当てられている。このうち2日間は核医学部で核医学の外来実習がなされる。

卒後教育としては、入局後の半年間放射線科病棟に病棟医として勤務し、次の2年間に放射線科における臨床部門(放射線治療部、X線診断部、核医学部、脳神経センター神経放射線科)をローテイトする。その後は将来専門とする1部門に固定して研修を続けるが、その間必要に応じて他科ないし他施設での研修を行い、また各自課題をきめた研究もそれぞれの指導者のもとでなされる。この他核医学を中心とした関東地区での研究会である放射線診療研究会に毎週参加することを原則とする。

本学における核医学の教育は卒前卒後とも放射線医学における臨床の一分野として学生ならびに放射線科入局者を対象としてなされており、他科入局者に対する講習ないし研修は行われていない。

本学での診断面での症例数は幸いきわめて多いので、研修時に臨床経験は充分得られるし、また治療面でも甲状腺疾患を中心に相当数の症例を経験し得る。以上から臨床面での卒後研修は効率良くなされていると考えているが、測定技術などの基礎的事項に関しては指導体制が必ずしも充分ではなく、放射線医学総合研究所の研修コースの利用などを含めて、現在その対策を考慮中である。